

[新資料紹介] 賀川豊彦・ハル書簡における意義

岩田三枝子

キリストと世界 28号抜刷 2018.3.1

[新資料紹介] 賀川豊彦・ハル書簡における意義¹

岩田三枝子

(東京基督教大学准教授)

1 序

賀川豊彦・ハル研究においては、『賀川豊彦全集』²や『賀川ハル史料集』³が発刊され、賀川豊彦（以下、豊彦）や妻・ハル（以下、ハル）自身が執筆した一次資料は比較的充実している。一方で、いまだ未公開の未整理資料も多数存在する。賀川豊彦記念松沢資料館（以下、松沢資料館）にも未整理・未公開資料は多く所蔵されており、現在も残された膨大な資料の整理が随時進められている。

そのような資料のなかで、松沢資料館に所蔵されている豊彦、ハル、および子供たち（純基、千代子、梅子）や孫（邦彦）との間に交わされた書簡（以下、豊彦・ハル書簡）のうち、すでに整理済みの豊彦・ハル書簡は160通存在する⁴。筆者は、直筆で執筆されたこれらの書簡のテキスト化を進めてきたが、本稿では、これらの豊彦・ハル書簡の特徴を明らかにし、その意義を検討することで、賀川豊彦・ハル研究への一貢献を目指す。

1 本稿は、上廣倫理財団研究助成（平成27年度）による研究成果の一部である。

豊彦・ハル書簡の閲覧にあたっては、賀川豊彦記念松沢資料館副館長・杉浦秀典氏に大変お世話になった。また書簡解説にあたっては、杉浦氏をはじめ、東京基督教大学大学院・山口陽一教授、共立基督教研究所・高橋伸幸氏、日本キリスト改革派勝田台教会・遠山佳枝氏からも多くのご助言をいただいた。この場をお借りして御礼を申し上げる。

2 賀川豊彦『賀川豊彦全集』全24巻、キリスト新聞社、1962-64年

3 三原容子編『賀川ハル史料集』全3巻、緑蔭書房、2009年

4 松沢資料館整理番号としては162通分であるが、うち2通は封筒のみであるために、本項での書簡の対象とはしない。

2 豊彦・ハル書簡概観

(1) 送り主と受け取り手

豊彦・ハル書簡の送り主と受け取り手の内訳は次のとおりである⁵。

豊彦からハルへ	111 通
ハルから豊彦へ	23 通

豊彦から子供等へ	15 通
ハルから子供等へ	2 通

子供等から豊彦へ	4 通
子供等からハルへ	8 通

豊彦・ハル書簡の大部分は、豊彦からハルにあてられたものとなっており、夫妻の間で綿密な情報共有が図られていた様子が見られる。また、子供たちへの書簡も少なからず送られており、長期間日本を離れることの多かった豊彦にとって、書簡が子供たちとの貴重な交流の手段として用いられていた様子もみられる。

(2) 投函地

豊彦がハルや子供たちへ送った書簡の投函地の内訳は下記のようにになっている。

国外	アメリカ	30 通
	イギリス	13 通
	オーストラリア	5 通
	カナダ	2 通
	ドイツ	4 通
	ブラジル	4 通
	その他（船上など）	9 通

5 一通の中に、例えば豊彦宛てにハルと長男がそれぞれに便箋にしたためている場合はそれぞれの表上の数に入れているため、表の総計は 160 通にはならない。

国内	45 通
不明	12 通

保存されている書簡のみとはいえ、国外の豊彦から日本にいるハルに送付された書簡が国内から投函された書簡数を上回っており、電話などの連絡方法が限定されている国外からの連絡において、特に書簡が連絡伝達手段としての役割を果たしていた様子がうかがえる。

(3) 時期

豊彦からハルや子供たちへの書簡の投函時期の内訳は下記の通りである。

1920 年代（-昭和 4）以前	7 通
1930 年代（昭和 5-14）	37 通
1940-45 年（昭和 15-20）	12 通
1946-49 年（昭和 21-24）	2 通
1950 年代（昭和 25-34）	61 通
不明	5 通

1930 年代における豊彦の世界伝道旅行、また第二次世界大戦後の世界伝道旅行の時期に各地から投函された書簡が多数を占めていることがわかる。逆に、第二次世界大戦直後の 5 年間には、保存されている書簡は 2 通のみであり、この時期は豊彦が伝道旅行に赴く機会も少なく、それゆえ書簡も執筆されなかったことがわかる。また、豊彦が亡くなる前年の 1934 年にもハル宛に 4 通が残されており、最後まで書簡が夫妻の間の重要な連絡伝達手段としての機能を果たしていた様子がみえる。

3 豊彦・ハル書簡の構成

第二次世界大戦前、大戦中、そして大戦後の三時期に豊彦・ハル書簡を大別し、以下、各時期における特徴的な書簡を取り上げる。

(1) 第二次世界大戦前（1910 年 [明治 43] -1935 年 [昭和 10] 頃）

豊彦がアメリカに留学中、ハルは共立女子神学校に在学していたが、その時代に
 交わされた書簡がある。ハルが共立女子神学校から送った手紙(1916年[大正5])、
 また豊彦がユタ州オグデンから送った手紙(1915年[大正4])などが残される。次は、
 保管されている豊彦からハルへの書簡のうち、最も古い書簡である。

1915年(大正4)5月27日 豊彦からハルへ [a350-00002]⁶

横浜市山手共立女子神学校
 賀川春子様

『貧民心理之研究』が手元に一冊もないので一寸と小冊子を作る必要があるか
 ら至急御送り、◇⁷下さい。

トヨヒコ

『賀川豊彦全集』によると、『貧民心理之研究』が警醒社書店より出版されたのは
 1915年(大正4)11月15日とされているが、この書簡で記す「小冊子」が、警醒
 社書店出版の『貧民心理之研究』を指すのであろうか。またこの手紙は、コピーに
 よって残されている資料であるが、現物ははがきのようにも見える。しかし、豊彦
 が1915年5月27日はアメリカ滞在中であることから、どのような時期にどのよ
 うな経緯でこのはがきがハルに送付されたのか、不明な点は多い。

1930年代(昭和5-14)は、豊彦が精力的に世界各地への伝道旅行に赴いた時期
 でもある。1934年(昭和9)には7通、1935年(昭和10)には8通、1936年(昭
 和11)には11通の書簡が残されている。豊彦は、アメリカ、フィリピン、香港、中国、
 オーストラリア、カナダ、シンガポールといった世界の各地から、手紙を送付して
 いる。手紙には、ホテルの便せんが使用され、会の様子や予定、誰にいくら金銭を
 送るようといった、事業の指示などが記載され、また時には短歌も記されるなど
 して、豊彦の思いが示される。次の書簡は、豊彦の第二次世界大戦前の世界伝道旅
 行最盛期である1935年(昭和10)、オーストラリアの伝道旅行からの投函である。

6 []内番号は、松沢資料館ファイル番号。

7 書簡中における解読不可の文字は、◇として記す。

1935年（昭和10）5月13日 豊彦からハルへ [35]

愛する春子様

五月十一日 豊彦

約二週間のメルボルンに於ける宣伝を了へて今日之から私ハ最後の三日間の伝道をすませるために豪州の首府キャンベラに向つて出発するところです。キャンベラハ僅かに人口八千人しか無いところですが、小さい大学があります。メルボルンの伝道ハみな好感を持つてくれまして、好都合でした。多くの友人を作りました。経済的にも半額だけの負担でなく、全額負担したいと努力してゐました。そして多分さうなるでせう。私ハ毎日三回以上各種の集会に出ました。そして、大に努力しました。

暇を見てハ図書館に行き、博物館に這入り、標本を集め、書物を貰ひ、また大本を買ひ集め大に「自然教案」の作成に努力してゐます。メルボルンでハ、地質学の驚く可き立派な博物館を発見しました。雨もヴェクトリア州（メルボルンのある州）だけで、生命の始めから、オ四紀層までの標本が得られるのだから驚く外ハありません。日本にもこんな博物館が欲しいと思ひました。豪州でも日曜学校の生徒が減りつゝあるさうですが、之ハ大問題だと思ひました。之ハ自然教案を採用するれば◇されるでせうが、豪州人ハまだ之に気がついてゐないようです。

豪州から日本に直接各種の品物一特に書物を送りました。それで何卒受取つておいて下さい。メルボルンから山下汽船の船で書籍一箱送ります。此後も送りますから受取つておいて下さい。横浜まで取りに行かぬバならぬかも知れまぬがよろしく。その中には京大駒井卓博士に進呈する書籍も這入つています。凡てハ祝福の中に進んでゐます。五月十八日また四日間海上にゐて、ニュージーランドに行きます。ニュージーランドハ人口百七十万位ですが、文化が進んでゐますから大に研究する積りでゐます

主にあれ

賀川豊彦

坊やの英語ハ発音の善い人に頼んで今の中に発音をよく教へておいて下さい。

千代子、梅によろしく

このような書簡には、精力的に伝道集会にて講演を行い、またその合間を縫うようにして豊彦の関心事である博物館等を巡り歩く姿が記される。またハルには、日本に送った「書籍」を横浜まで出向いて受け取るようにと指示を出し、日本国外と国内と夫婦が地理的に離れた状況にあつて、ハルとの信頼関係に結ばれた事業活動の連携の様子もみられる。さらには、離れて過ごす期間も長くなりがちな子供たちの教育の様子にも心を配る言葉もしばしば登場する。

次の書簡は、長男・純基に向けられた書簡の一つである。

1931年(昭和6)8月3日 豊彦から子・純基へ [19]

坊やは毎日時間をきめて勉強してゐるでせう
さうしないとだめですよ
このハガキはニューヨークの一番高い家にのぼつた時に買ったものです。
千二百五十尺あります
神様に坊やが善い子になるやうに祈つてゐます

トヨヒコ

このように、子供たちに向けては、「良く勉強するように」といった内容の手紙や、絵葉書などもしばしば書き送っている。一方、時には子供が描いた絵が豊彦に送られることもあつた。次は、東京に滞在する長女・千代子が10歳の頃に、豊島に滞在する豊彦に向けて送った書簡である。

1935年(昭和10)9月10日 長女・千代子から豊彦へ [A300-00284-3]

お父様

御元気でいらつしゃいますか。御安じ申し上げます。お母さんがおもちかへりになりました柿、わぎ〜お父様が取ってくださいまして、きょうしゆくし

ております。

私はまだ島には行つたことがありません。けれどもお母さんにうかゞひますと、大変静かな景色のよい所とうかゞひます。私も是非この冬休みにまいりたいと思ひますがいかゞでせう。梅ちやんは、夜る電燈がなくて、他の光をつかうのにきょう味をもつてゐます。私は浜にそだつたことがないので網でお魚をとるのがみたいと思ひます。

お母さんが、浜でかつてゐらつしやつた網をつくる竹のよーじみないたものはじめて見ました。

今年は海に行きませんでした。九月の十日頃でもさむくなく、およげるときゝますと、およぎたくなります。こちらはすゞしくて水に入ると風邪をひいてしまひます。

十月十七日の信徒大会には学校から行きます。明日は遠足です。四五年は金沢文庫、一、二、三年は登戸へ行きます。恵泉デは十一月三日ですが日曜なので二日にします。

今度のバザーでの純益は愛生園に河井療^(ママ)といふのをつくるためです。

皆仲よく勉強してゐますから御安心下さいませようにおねがひ致します。

だん―寒くなつてまゐりますから御体を大切にして下さい。

賀川千代子

九月十日

御父様へ

書簡が、多忙な豊彦と子供との貴重な交流の手段であつた様子もみえる。

(2) 第二次世界大戦中 (1936年 [昭和11] 頃-1945年 [昭和20])

1930年代(～昭和9)半ばごろから、手紙には、戦争への言及も増える。1936年(昭和11)7月27日のドイツからの手紙では、「この文明でなぜ戦争せねばならぬかと思ふと悲しくなります」と書き送っている。

1940年(昭和15)、憲兵に捉えられた後、豊彦は香川県・豊島で過ごす、東京に残つたハルに手紙を送っている。

1940年(昭和15)9月19日 豊彦からハルへ [58]

香川県豊島
賀川豊彦

冠省

この間中ハほんとに御心配また御心尽しの程感謝いたします 強いあなただから安心いたして居りました

私ハ昨日 豊島に来ましたが汽車の弁当が悪つた見え 到着と共に下痢をやり 昨夜より十数回下痢し昨夜より今日にかけ絶食して居ります。

島^(ママ)に凡てにつけ不便にて困つて居ります

然し天气が善いので寝てゐても愉快です。一生懸命に勉強するつもりです。

祈つています。昨夜ハ微熱がありました今日ハありませぬ。然し下痢ハまだ止つてゐませぬ。

純基によく勉強するようにすゝめて下さい。

八重子様にもまた親切に蒲団まで借してくれました。

島で綿が四五貫取れましたから大蒲団の「ガワ」を二枚分縫つて大至急御送り下さい。客が来てもきせる蒲団がありませぬ

主にあれ
豊彦

主にある
春子様
九月十九日

「この旨中ハほんとに御心配また御心甚しの程感謝いたします 強いあなただから安心いたして居りました」とは、憲兵に捉えられ、渋谷拘留所で過ごした出来事を指しているのだろうか。書簡では戦中の時世を思わせる粗悪な封筒と和紙を用い、薄い墨で筆書きであり、乱れた大きな字が印象的である。また「此際、事業を縮小ハ已むを得ないでせう」(1940年(昭和15)10月10日豊彦からハルへ [60])と、戦争の影響により、豊彦の事業内容の変更も迫られる苦渋の様子が記されている手

紙もある。次は、同じ時期に送付された東京のハルから兵庫県・瓦木に滞在する豊彦への書簡である。

1940年（昭和15）10月17日 ハルから豊彦へ [A300-00284-4]

豊彦様

今日ハ東京を御出発になつた日で子供達と取り分け父様の為めに祈りました
御機嫌よく愈々御健かで嬉しいことで御座ります

火の柱の原稿を読ませて頂きました

二六〇〇年奉祝信徒大会ハ誠に盛大で御座りました 正確な参加者の人数ハ解りませぬが 希望致して居りました三万人位集まつたかと存じます いづれ人数ハ判明致しませう

クロバーの柿御送り致します 松沢教会のハもう芽が出ました

種を蒔かれる時 蒔いた種が飛ばぬ様に軽くて土を押すと宜敷ときゝました

山羊の家が出来て仔が生まれますれば結構と存じます 十二月に寄せて頂く時にハ見せて頂けますことゝ楽しんで居ります

序文届きましたので、四日前豊島にお送り申しました 先ハ右まで

十月十七日

春子

平井様がランプを御届けいたしました 金田様に御願ひして大阪迄お持ちを願ひ藤崎様に願つて豊島に持来て願ひます

書簡では、心身の苦勞が重なる豊彦のために、「子供達と取り分け父様の為めに祈りました」と心を配りつつも、「柿」や「山羊」等の日常的な話題があげられる。あえてこのような日常的な話題で豊彦の心に平常心を与えようとしたのだろうか。そうだとすれば、そのような心遣いからも、先の豊彦からの手紙にあったように、危機的状况の中でも豊彦を「安心」させる「強い」ハルの姿勢がみえるようである。

(3) 第二次世界大戦後（1946年 [昭和21] -1960年 [昭和35]）

戦後は、1950年（昭和25）イギリス伝道開始以降の書簡が主である。次は、戦争の爪痕が残るイギリスからの書簡である。

1950年（昭和25）1月31日 豊彦からハルへ [78]

戦争が如何に恐ろしいか、大勝利を得た英国が未だに復興出来ないことを見てもよくわかります。ドイツも数十年以上復興にかゝるでせう。西洋ハ日本の工業的復興をさへおそれてゐます。キリスト教的精神を以つて互に助け合ふ精神が無ければ結局世界ハ滅亡します。朝早く、その為めに祈つてゐます。

第二次世界大戦が終結し5年近くが経過してもなお種々の戦後の不自由さの中にいる人々の様子を見、「キリスト教的精神を以つて互に助け合ふ精神」の必要性を訴える。

特に1950(昭和25)年は、資料館所蔵書簡の中では最多の31通/年となっている。次は、アメリカ伝道旅行最中の書簡である。

1950年（昭和25）10月26日 豊彦からハルへ [96]

T. Kagawa
252, Fulton st.
Brooklyn 1
New York
主にある春子様
一九五〇、十、廿七
賀川豊彦

無休の旅行に、見物する元氣ハ勿論のこと好きな博物館を見る元氣さえ出さず、辛じて、少しづつ、「本」を読んでゐます。

一ヶ月十五日以上、飛行機でとび、一日三回位平均話をするので、創作欲の多い私にハ、日本のことが気にかゝり全く弱つてゐます。然し、もうあと二ヶ月になりました。日本の教会のことを思つて、努力してゐるのです。

私の書物などでも、翻訳を^〇直すのでまだ出ませぬ。で、横山春一氏の著作も翻訳料が原稿料以上かゝり出版は不可能です。翻訳の文章が拙い^〇と出ないのです。で、自然的に翻訳したい人があれば、すれば善いので、おいそれと出るものではありません。

疲れて、ピアノや、オルガンをくれと、他人に頼む元気が出ないのです。(カルフォルニアで頼んでみます。)私の気分として、『くれ・くれ』と云ふのは大嫌ひです。それと、みな私に寄付を依頼してくるので弱つてゐるのです。

送金がおくれてすみませぬ。千住新橋を渡つた、貧民街に鈴木武男氏が「五百平」の土地付の保育園を見付けて、買ひたいと云ふて来ました。町長を通して、百万円なら買ふと云ふてやりました。「貧民伝道」の爲め努力します。百万円も三四回に分納します。

キリストにあつて善戦します

主にありて

トヨヒコ

1930年代(昭和5-14)と同様、伝道集會を精力的にこなす一方、肉体的、精神的に苦しむ様子も見られる。また、「ピアノや、オルガンをくれと、他人に頼む」とあるが、例えば、本所賀川記念館の東駒形教会には、戦後豊彦がアメリカから持ち帰つたという足踏みオルガンが設置されている。また、豊彦の長女・千代子の娘である富澤康子氏も、実家にはアメリカからのグランドピアノが置かれていた記憶があると語っている⁸。これらのオルガンやピアノもまた、書簡に記されたような機会にアメリカ在住の豊彦の事業を支援する人々から贈られたものだったのであろうか。

この頃になると、戦時中に記された書簡とは異なり、便箋の質も良くなる。また内容は、伝道旅行の報告にとどまらず、成長した子供たちの進路に心を配る様子が見られる。次の手紙は、関西学院大学神学部⁹に在籍する次女・梅子の進路に向けた一文である。

8 2016年9月10日賀川豊彦学会にて聴取。

1950年(昭和25)10月25日 豊彦からハルへ [94]

「梅子」にハ、あまりアメリカに来ることをいそがず、関西学院大学で充分英語の論文が書けるやうに勉強するよう云ふて下さい。みな英語で困つてゐます。少くとも二年間ハ神戸でミツチリ勉強する必要があります

やがて子供たちが結婚し、孫が生まれると、孫に宛てた書簡も登場する。次の手紙は、長男・純基の長男・邦彦に向けた書簡である。

1953年(昭和28)4月19日 豊彦から孫・邦彦へ [107]

賀川邦彦様

邦彦さんも三年生になつて一生懸命に勉強してゐるでせうね。私ハ毎日ブラジルの奥地で廻つてイエスさまのお話しをしてゐます。ここには四十八メートルもある大蛇があるところです。それを兵隊が十九時間も戦つて丸を五百発もうつて退治したさうです。六月廿日頃また、お目にかゝります
パパによるしく。パパを大事してあげて下さい。

ブラジル

一九五三、四、一九、カガワ トヨヒコ

また、日本に残るハルからも近況を知らせる書簡が頻繁に送付された。次は、ロンドンに滞在する豊彦に向けてハルが送った書簡である。

1950年(昭和25)4月19日⁹ ハルから豊彦へ [A300-00044]

Dr.T. Kagawa

c/o Dr. Thomas Cochrane

9 松沢資料館整理情報では、1951年(昭和26)書簡となっているが、豊彦が1950年のイギリス滞在中の同時期に他の多くの書簡が投函されていること、また教会で総会があったという「4月16日」は1950年には日曜日に当たることから、1950年の書簡であると推測できる。

The Movement for World Evang.
Founder's Lodge, Mildmay Centre
London N.I. England

豊彦様

四月十七日 今日ハ好天気で御座りました 教会の八重桜が只今盛りで御座ります もう独乙の講演を御済ませになり英国で御座りませうか 随分御苦労で御座りませうと御察し致して居ります まだ―外国伝道が続くこと、思ひ

ますと中々長い時間を存じます

一生懸命祈つて居ります 『ひとり旅』ハ皆様に読まれてなぐさめの言葉を送られて居ります

毎日新聞の通信をよくも御続きになると存じます

どうぞ御眼御大切に願ひます

前便で私ハ間違つて認めたかと思ひますが毎日新聞社から御送金したものが私方へ送り返されたお金の額ハ二百ドルでありまして七万弍千円であります

四月十三日ハ平和学園の理事会が村島帰之氏宅で開かれ私も出席いたしました

村島氏ハ元気で居られます 執筆もされて居ります

四月十六日にハ松沢教会総会を開き参拾五万円の前算を組みました 教勢ハ御留守の為めいささか落ちましたが是から大いに努力いたし度いと存じます

四月廿八九日にハ東京で全国信徒大会が開かれますので地方の方々に御目に懸れること、思ひます 純基ハ相変わらず仕事をして居ります 千代子ハ中々忙が

しく毎夜十時頃迄働いて居ります 栄養を注意して倒れぬやう心懸けて居ります

梅子ハ勉強も努め働きも精を出し 新川の子供も番町の生徒も心から愛して導いて居ります シゲ子も将来の準備を忙がしくして居ります 本月も米国

から送金ありました由 明後日メーヤー氏より受取ること、なつて居ります

徳島ハ新居とよ様に弍千円づゝ送金致すことに致しました

所々からお金の要求が多いので困ります 皆ハ悩んで居りますから出来るだけ応じ度いとハ願つて居ります

多くの方々が欧州伝道の為め祈つて居ります

どうぞ御大切に願ひます

四月十九日

上北沢 春子

ここには、事業の進捗状況をテンポよく報告するとともに、子供たちやまた同居する姪であるしげを含む家族の様子も知らせ、豊彦とハルの活動とまた家庭生活の両方におけるパートナーとしての視点もみえる。

また1955年（昭和30）にはハルがアメリカのイエスの友会から招待され、4か月のアメリカ伝道旅行に出かけた。その折には、それまでとは逆に、日本から豊彦や家族がアメリカ滞在中のハルに向けて、近況報告の書簡を送っている。次の書簡でも、豊彦自身の国内での活動の様子を綴っている。

1955年（昭和30）6月28日 豊彦からハルへ [125]

c/o Rev. Y. Ogawa
1400 W. Chicago ave.
Chicago, Ill,
U.S.A

主にある春子様

みな様への手紙を総合して、さぞお困りのことと推測申上ます。しかし、シカゴにて梅子とお会いなされ久し振りにうれしかつたでせう。

私ハ生命共済組合の全国組織の序にキリスト運動をつづけております。七月十二（岐阜）七月十三日（名古屋）七月十四日（三重）を巡回します。八月ハ山形に行きます。ラクーン伝道団33名が来られ感謝しております。兵庫県、奈良県、福島県等に分散して伝道してくれます。有難いことです。

ハワイよりまた一週間滞在してオアフ島以外の島を巡回してくれと云つて来た由、金銭を離れて伝道の応援をしてあげて下さい。一週間位日本に帰ることが遅れても善いです。だが、之も健康（と）（紙破れ）御相談の上のことです。例年の如く七月四—七日まで毎晩四時間の連続講演を明治学院大学でいたします。イエスの友修養会ハ箱根強羅（七月廿二—四日）比叡山（七月廿五—七月廿七日）の二ヶ所にて開きます。デンバアの中杉姉が松沢を訪問されました。

デンバアにてあなたに会うために帰ると云つて、汽船に乗られました。デンバアにてお会いの節 献金の感謝をして下さい。M.T.L の為めの献金運動の中心人物です。

「明治学院大学」での「毎晩四時間」の「連続講演」、箱根強羅と比叡山でのイエスの友修養会、岐阜、名古屋、三重への「生命共済組合の全国組織」のための「巡回」等、ここにも精力的に活動する豊彦の姿がある。阿部志郎氏が、明治学院大学での講演会で姪のしげが付き添っているのを見かけた、と語っているが¹⁰、この頃のことかもしれない。

豊彦は1958年（昭和33）に晩年の大著『宇宙の目的』を出版するが、国外での活動が続く中、執筆時間が思うように確保できない焦燥感も吐露される。下記は、シカゴから投函された書簡である。

1954年（昭和29）9月27日 豊彦からハルへ [191052]

私ハ来る十月二十一日ハワイに飛び十月廿二日の夜か、十月廿三日の朝 日本向の飛行機にのります。

『宇宙目的論』の瞑想を毎日相変らず続けてゐます。自分ながら面白いので書きたくて困つてゐます。時間が無いのが悲しいです。

（中略）

「宇宙目的論」も四ヶ月位暇があると完了出来るのですが、惜しいものです。祈つてゐます。時間ができて書けるように。

豊彦の『宇宙の目的』執筆への執着ともいえる情熱がしのばれる。

1957年（昭和32）を境に、残されている書簡は激減する。豊彦自身の体調もすぐれず、それまでのように幾日も家を空けての旅行が減り、手紙が送られる機会そのものが少なくなっていたのかもしれない。亡くなる前年の1959年（昭和34）の書簡が4通残されているが、いずれも、最盛期の豊彦の達筆な筆跡に比べると、文字は弱々しく、乱れがちである。次の手紙は、四国へむかう途中に倒れ、そのまま入院となった地からの投函である。

10 2016年3月31日インタビュー聴取。於：横須賀基督教社会館

1959年(昭和34)3月7日 豊彦からハルへ [133]

春なれば 若芽 萌え出て
野を飾れ 淋しき山に 小鳥 誘(いざな)え

ふたつきも 春と 別れて 床につけば
月はいづこを 照らし つるらん

内科病院 トヨヒコ

一句目にも二句目にも「春」の語が登場する。「ふたつきも 春と 別れて 床につけば」とは、妻であるハルと別れて過ごしながらも、同じ一つの月のもとにいる自分たちの姿を重ね合わせているのだろうか。伝道旅行最盛期には、「ふたつき」どころか1年近くも「別れて」過ごしていた期間もしばしばであったが、体力の衰えを覚える中、「別れて」過ごす期間がなおのことハルの存在を思わせるのかもしれない。

4 豊彦・ハル書簡の意義

これらの書簡は、次の点において、意義があると考ええる。

第一に、一次資料としての意義である。『賀川ハル史料集』や、『雲の柱』等で活字化されて紹介されている数通を除き¹¹、ほぼ未公開のものとなっている。また、『雲の柱』等に紹介されているものであっても、個人名等の原文の文章が省略されている書簡もあり、一次資料として意義の高いものだろう。

第二に、豊彦の世界各地の旅行日程、および、日本における事業展開の裏付けの一つとなるという点である。豊彦からハルへの手紙は、伝道旅行の報告書さながらの内容であり、詳細な日程、いつ、誰と、どこで会ったのか、どのような集会が開かれ、どの程度の聴衆が集まったのか、といった詳細が記されている。また、その時々豊彦自身の感想も挿入されており、それらの多忙な活動の中で、豊彦がどのように感じていたのかを知る手立てにもなる。次は、北海道の伝道旅行中に書き送

11 例えば、ハルから豊彦への書簡(1917年[大正6]3月2日付)など(三原容子編『賀川ハル史料集』第1巻、2009年、221-222頁)。

った書簡である。

1930年(昭和3)10月30日 豊彦からハルへ [10]

釧路市富士屋旅館
賀川豊彦
春子様

お手紙有難う。旭川を経て十時間余 汽車に揺られ、釧路に参りました。此東まで来ますと 北海道の気が致します。

冬服ハメルトンが弱いのでランヤ服を送つていただきましたかつたのでした。ズボンが一寸と惨になると破れるのです。とても寒いので綿でハ駄目です。

各地とも、謝礼を出しませんのです。

それで、少しも金が送れませぬ。どうか共益社で融通して貰つておいて下さい。金沢、富山、福井へも廻ります。之も自費で行くのですから、その積りで祈つていて下さい。神は餓させ給ひませぬ

トヨヒコ・カガワ
釧路にて

ここには、「各地とも、謝礼を出」すことのできず、さらには北海道だけではなく、「金沢、富山、福井」へも「自費」で出かけていく状況の中で、「神は餓させ給ひませぬ」という豊彦の覚悟が語られている。

豊彦・ハル書簡の第三の意義は、ハルの活動の一端が明らかになるという点である。従来から、妻・ハルの豊彦の同労者としての功績は高く評価されてきたが¹²、

12 ハルについては、例えば国内の評価においては、「ハルにも考えや主張があった」(賀川純基)「家庭人としての賀川豊彦」(2006年)(三原容子編『賀川ハル史料集』第3巻、緑蔭書房、2009年、117頁)や、ハルの見識は「固有の視点を感じさせもする」(倉橋克人「女性史における賀川豊彦7 賀川を支える女性 二 芝、ハルとの出会い」)『福音と世界』新教出版社、1992年1月、71頁)、「生涯にわたり、最大の理解者・協力者となったのは芝ハルという女性、後の賀川ハル婦人」(加山久夫、阿部志郎・他『賀川豊彦を知っていますか一人と信仰と思想』教文館、2009年、20頁)、「ハル自身の独自性」(三原容子「資料で見ることができるハルの人となり、そして活動」(三原容子編『賀川ハル史料集』第3巻、緑蔭書房、2009年、434頁)、さらに「ハルは豊彦の

その具体的な働きの内容にまで触れられているものは少なかった。書簡の中では、豊彦が、誰々に幾らを送金するように、また、活動について調査するように、等々、細かな指示を矢継ぎ早に送っている。ハルの返事からは、豊彦の指示をこなしていく様子がよくわかる。次の書簡でも、そのような指示を記している。

1936年（昭和11）4月17日 豊彦からハルへ [41]

口上

ボストンでハ嘗てなき大集会を開き一回に一万二千人も来ました その献金で、大阪の金田牧師の生野セツトルメントの敷地を買求めたいと思ひます。その約束をしました。で、今迄の所でハ自動車が入らないので、自動車の這入る所を五、六千円の程度、で求めて下さい。金ハすぐ送ります。就てハあなたが直接西下して、関西の事業を一々視察し、報告して下さい。お願いいたします。

ボストンにて トヨヒコ

豊彦はアメリカ滞在中で、1929年（昭和4）に生まれた末子もまた7歳頃と幼い中であって、「大阪」に「敷地を買求め」るために、必要な金額を用意するだけでなく、さらには、東京から大阪に赴き、「関西の事業を一々視察し、報告」するように、との指示をこなすことは、金銭的な側面だけではなく、子供たちのその間の世話等、背後の段取りや気苦労もしのばれる。ハルから豊彦に向けて送られた書簡にも、豊彦の活動をともに担うハルの様子が見られる。

1950年（昭和25）10月15日 ハルから豊彦へ [93]

Dr. Toyohiko Kagawa

影響を深く受けたが、それに甘んじることなく、彼女自身の思想を、より積極的に女性解放運動へ、また貧しい人々の救済へと活動の幅を広げていった」（鍋谷由美子「賀川（芝）ハルをスラム街へと動かした原動力とは」（『雲の柱』28号、松沢資料館、2014年、73頁）等、豊彦の理解者であったと同時に独自の思想を持つ女性としての指摘がある。

c/o Rev. J. Henry Carpenter
Cadman Plaza 252 Fulton st.
Brooklyn 1. New York
U.S.A.

拾月十五日
豊彦様
春子

十月七日出の御手紙頂き有難く存じました
御帰国が十二月三十日と確定されましたことを承知致しました 祈りをきき上げ神ハ特に力強く働かせ下さいました今度の世界伝道を誠に有難いこと、感謝を致します

米国の御送金に対して御心配かけ相済みませぬ

カーペンター氏のは八月十四日 三〇〇ドル受け取つた以外のものハ未だ到着して居りませぬ 十月十日の氏の通信にも今日も送金したとあります 私宛に送つたとあります 十月八日にバークレーアルバニー教会連盟からホイツテモーア牧師を通じ鋸山伝道の為め八六、七三五円(約二四〇ドル)を送金され日本の放送局に居るケリー博士から現金で受取ました 其他明日メーヤ氏より受け取る分ハ二口あり

△ユタ州 ウサミ 四〇〇ドル

△ソートレーキ集会 日本人献金 一一九ドル卅八仙であります この二口は恒吉氏からメーヤ先生を通じてあります

恒吉氏からハ毎月羅府からの六〇〇ドルハ必ず来て居ります

○本所の土地を購入に就てハ御指示のやうに進めて居ります ○堀切も工事を進めるやう手配して居ります ○新倉の登記に就て急がし度と交渉に参り白水氏にも頼み、又北川兄をも遣はして居りますが また済みませぬ ○大阪水害地にハ 二階建を許可して宜敷のでありませうか 之に就て御返事を頂き度存じます

○御殿場高根保育所修繕に就てハ 五万か六万円か必要ですが御許し下さい

○猶崎牧師(鋸山伝道)として五千円宛送金致してゐます

○廣瀬廉太郎氏へ協同組合の油(輸入)の仕事に就て木立氏との相談の上参千

円を毎月渡すことに致します

○十川秀一牧師へ建設資金壹万円ハ仰の通送金済

今日ハ東駒形教会記念日で古い本所松倉町時代を思ふことで私も礼拝後それに出席致しました 二十二日夜ハ三宿の(三軒茶屋)教会に頼まれて参ります 壹万九十人の追放解除があり杉山三輪其他に祝電を致しました 内地ハ栗と柿の季節です 伝道の時でありました 純基もラクーア伝道に(東京)聖歌隊として参加致します 老母より宜敷申上げました

豊彦からの数々の指示に対応しつつ、ハル自らも各地の教会等を訪問し、ハル自身の活動も進めていく姿がある。

このようなハルの働きは、豊彦が長期間日本不在中であっても、事業を滞りなく進めることのできた要因の一つだっただろう。本書簡によって、豊彦・ハルの公私におけるパートナーシップの一端を見ることができる。また、時には、公私におけるパートナーである妻に向けての愛情の言葉も書簡に記される。

1934年(昭和9)2月4日 豊彦からハルへ [00025]

台北市本町三丁目三番地
旅館 朝陽号方
賀川豊彦
愛する春子様
台北にて

恵まれた集会をつづけてゐます

台北教会 で三回に二百名以上救はれました。その内一回の学生集会に百六十二名決心しました。

感謝してゐます。

やはり航海ハつらひけれども出てくるとうれしいです。

ヒモチヤンも来てくれました。帰りたいと云ふてゐます 迎へてやつて下さい。

眼も手拭を巻くやうになれました。感謝です

この中に新聞も凸鏡使用して読めるでせう。

約かだつたが春子と二人で座ることの出来たことをうれしく思つてゐます。年をとると、「性」を離れて二人で座るよろこびをつくづく思ひます。恵まれて下さい。

主にあれ トヨヒコ

台北で記されたこの書簡では、共に46歳となった豊彦がハルに向けて、「約かだつたが春子と二人で座ることの出来たことをうれしく思つてゐます。年をとると、『性』を離れて二人で座るよろこびをつくづく思ひます」と語りかける。かつて、1922年（大正11）に豊彦とハルが夫妻で台湾を訪れた際に、結婚9年目にして長男・純基を授かった状況をも髣髴とさせる一文である。結婚後約20年が経過し、夫妻を結びつける絆は「性」にとどまらず、静かな愛情へと深化していったのだろうか。

第四に、本書簡は、賀川家の歴史でもある。1942年（昭和17）から1948年（昭和23）の間の書簡は一通の短いハガキを除いては、現在松沢資料館で整理済みの書簡にはない。第二次世界大戦前、戦中、戦後の書簡はほぼ残されていないという事実そのものが、戦争の緊迫した時代を感じさせる。次は、憲兵に捕えられたのち、豊島で過ごしている豊彦からハルへ送られた書簡である。

1940年（昭和15）10月22日 豊彦からハルへ [61]

来年三月末でも学校の関係上家族ハ東京に居て善いと思ひます。

ここでは、家族がどこで過ごすべきかという問題にも触れられており、第二次世界大戦の不穏な空気を感じさせる。

やがて戦争が終了し、1950年（昭和25）以降は豊彦の世界伝道が再開し、ハルへの書簡も再び増加する。この頃には、賀川家の子供たちはそれぞれに、長男・純基は結婚して家庭を持ち、長女・千代子は医師になり、次女・梅子もまた成長し大学生として書簡に登場する。

1950年(昭和25)1月26日 豊彦からハルへ [75]

千代子様が英語の御勉強も結構だが、貧しい人達の為めに医術を生かせば、その方が神様によるこばれます。で、本所の「賛育会」へ午前中でも実習に行くやうすゝめて下さい。河田茂先生は私の友人だからあなたがつれて行けば善いです。あそこは小児科産科内科が、実によいです。

ここには、成長した長女の進路を気づかい、最善の道を用意しようとする豊彦の親心がみえる。

この豊彦・ハル書簡は、明治、大正、そして昭和の戦前、戦中、戦後の激動の時代を生きた、一つの家族の物語としても、読む者の心に深い印象を残すものとなっている。

5 結び

本稿では、松沢資料館で整理済みの豊彦・ハル書簡のうち、特に未公開の書簡を取り上げてその意義を検討した。最も信頼のおける間柄である夫妻の間で交わされた書簡からは、活動に邁進する姿と共に、時には豊彦自身の苦悩と嘆息も交錯する。また、書簡を通して、豊彦の活動の背後にあった妻・ハルの役割や、子供たちや孫たちへの親としての心遣いの一端も明らかになった。

今回テキスト化を行った豊彦・ハル書簡は全体で75,000字程度の分量であるが、その中で未解読の文字が300字ほど残されている。特に、地名や人名等の固有名詞の解読は困難な面も多い。また、未整理・未公開の書簡は今後もさらに発見される可能性は大いにあり、随時書簡リストに追加しつつ、その意義の検討を継続していきたい。